こどもの明るい未来のために語り継ぎます

私の戦争体験 第7集

特集号 1985年6月

いずみ

coop

大阪いずみ市民生活協同組合
堺市長曽根町1191-1☎0722(53)4888(代)
●発行責任者・川島利雄 ●編集・機関紙委員会

愛する孫たちへの語り継ぎ

高石支部
吉田　卓人
吉田　照子

戦争を体験した者がだんだん少なくなり、その無残さは、とても筆や口では語りつくせないのですが、せめて、我が愛する五人の孫たちに、語りついでおきたくて、重いペンをとりました。

前線で泣きながら死体処理

おじいちゃんは、中支派遣栄（サカエ）一六四四部隊、別名、防疫給水部隊の一員として、今の中国へ行きました。船に乗って朝鮮に上陸、満州へ入り、奉天を通って山海関へ渡り、除州から南京へと向かいました。おじいちゃんたちの役目は、予防注射、のみ水の検査、傷病兵の看護、伝染病の原因究明などでした。

雨のふる中を一晩中歩いたり、古いお寺にとまったり、目的地についた時には、新しい靴の底がなくなっていました。食べ物は、玄米とみそだけで、おかずは梅干でした。

毎日毎日、雨ばかり、そのうちに食べ物はなくなり、おまけにコレラという病気がはやり、たくさんの兵隊さんがなくなりました。その死体を皆荷車につんで運び、山のようにして焼きました。死体は皆、真っ黒でした。それは、栄養失調と病気のせいでした。この人たちの、お父さんやお母さんがこれを見たらどうだろうと思うと、涙がとまりませんでした。

戦争とは、親の知らない遠い所で、たくさんの人が、みじめな死に方をするものです。二度とあってはならないと思います。

（卓人）

二度と歌いたくない歌

女子師範を卒業したのは、終戦間近の昭和十九年でした。大きな期待と希望を抱いて岸和田市の小学校へ赴任したのに、まっていたのは、学徒動員のための工場通い、防空頭巾を肩にかけた子供たちと、学校から三十分以上も歩いて工場へ行くのです。

そのころは、大学生は戦場へ、中学生は工場へ、小学生でも上級生の男子は兵器工場で油にまみれて飛行機の部品作り、女子は軍服や包帯作りなどの作業に、命令一つで、かり出されました。

勉強したいなあ、本読みたいなあ、運動場で遊びたいなあ、といいながら慣れない仕事をしていた子供たちのことが目に浮かびます。慣れない仕事なので、すぐに疲れます。工場の人たちはきびしいし、思いっきり発散できるような場所もありません。その上、いつ、空襲されるかもわからないのです。

遊びたい気持は、いたい程わかるのに、自由にさせてやれない。がまんしきれない子供たちは、作業場の中で、おにごっこや、かくれんぼをはじめます。勿論、工場からは叱られ「先生！何してるのや」と言われます。工場の外に出られるのは、往復の道だけなのです。その道で、誰からともなく、疲れた声で歌い出すようになったのが「むかし、むかし、そのむかし……」お山の杉の子の歌なのです。その当時は、いろいろの思いのこもった、この歌、聞くたびに、子供たちの顔がうかぶのです。子供たちもつらかったでしょう。だけど、つきそっていく者も苦しかった、ごめんね、がまんしようね。「きっと勝ってくれるのだから」と信じこまされていたのに。

戦争が終わりに近づくにつれて、空襲がはげしくなり、やっと開放された気分になれる往復の道も危険にさらされるようになりました。機銃掃射にあったのです。飛行機に乗っている人の顔が見える程の低空から、ダダダダ。こわいの何の、ことばではあらわせません。生きた心地はありませんでした。皆を守らなくては…の気持だけでした。一斉に、川の土手を、ころげておりました。幸い皆、無事でした。近くの工場をねらったらしいです。

戦争がおわった、と聞かされた日、ああ、もう、これからは勉強してもいいんだね、といって喜んだのに、教科書は黒線だらけ、ノート、鉛筆、学用品は何もないのです。体操しようにも、運動場はいも畑になっているんですものね。工場通いが終わったら、今度は食料作りなのです。でも、みんな、がんばりました。土の上に字をかいたり、はたけの草引きをしながら、思いきりおしゃべりしたり。工場に行くよりはよっぽど楽しいですものね。

そんな思い出の一ぱいある「お山の杉の子」今でも、この歌は絶対に歌いません。歌えないのです。涙の方が先に出てきて、声にならないのです。皆の顔が、「先生、たすけて…」と泣きながら、浮かんでくるからです。

あなたたちには、どんなことがあっても、こんな思いはさせたくありません。又させないような世の中になるよう、皆で努力しなければならないと思うのです。

（照子）

おかあさんごめんなさい

新金岡支部
藤原　亘子

昭和二十年八月六日当時、私は広島の爆心地から九〇〇㍍の所に住んでおりました。

家族は、両親と兄三人、姉二人と私の八人ですが、長姉は既に他家に嫁ぎ、長兄も出征中だったので、家では六人が暮らしていました。

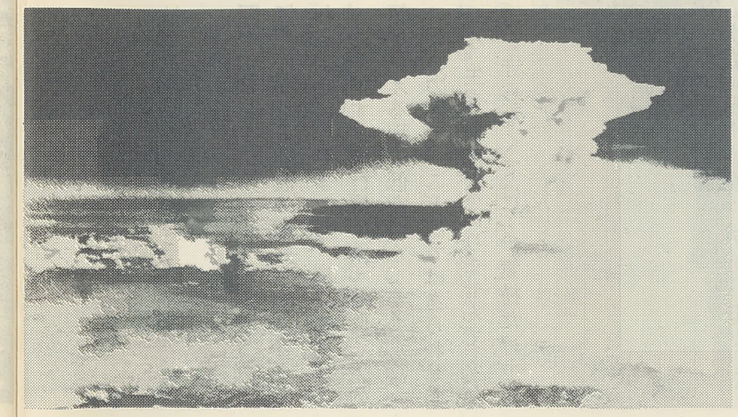
その時私は五歳でしたので、午前八時十五分のあの瞬間のことは殆んど覚えておりませんが、真っ赤な火の海だけが脳裏に焼きついています。家の中にいた三番目の兄と私は爆風で二階から吹きとばされ、その上にメチャメチャに壊れた建物が覆いかぶさって、四本の脚がそのすき間からのぞいていた、と助け出してくれた父に聞きました。母はガラス窓の傍にいたのでガラスの破片をまともに浴びて、身動きできない状態でした。

漁師の家へ嫁いでいた長姉の家から舟を出してもらって（交通機関は全てストップだった）、川から姉の家へ運びましたが、川には死体がゴロゴロしていて、それをかき分けかき分け通らねばならなかったのが、とてもつらかったと姉から聞いております。

それから二週間ほどして母は亡くなりました。宮島の伯母の家に預けられていた私は、母の死の前日に呼び寄せられたが、「くさい、くさい」と近寄らなかったそうです。母の心中を思うと、それが心残りでなりません。

結局、被爆して亡くなったのは、この母と出征中の長男（広島にいた）と、外出中の次男の三人です。父と二人の姉と三番目の兄と私は軽い怪我で済みました。

その後、みんな髪が抜けたり、傷口が化膿して臭くなったりはしましたが、それ以後は病気らしい病気もせず、誰も原爆症にはかかっていません。爆心地から一キロ足らずで被爆しながら元気なのが不思議だと思われています。みんな日陰にいて放射能を浴びなかったのと、被爆後預けられた親戚がみな海に近く、毎日小魚をよく食べたので、それがよかったのではないかとも言われています。食べる物の大切さを思うこの頃です。



メーデーと空爆の思い出

松原北支部
西浦　義道

私の娘もやっと二十歳と十七歳。この子たちが結婚するまでは何が何でも元気でいてやりたい。先日の母の日、二本のカーネーションを娘からもらった。「あんたたちは赤いカネーションでいいね。お母さんはずっと白だったのよ…」と話しながら、あのいまわしい日のことを思い出しておりました。

（談）

毎年五月一日、メーデーには働く人たちが大阪城公園に集まり、祭典を開く。可愛い子供連れの若い夫婦の姿も多く見られる。この平和な祭典を眼の前にしながら、わたしは四十年前のアメリカのB29機による空爆を鮮やかに思い出す。

戦後生れの人が多くなり、この大阪城公園は第二次世界大戦中、軍需産業のメッカであり、第一から十に及ぶ大きな工場が建ち並び、大阪陸軍造兵廠（また工廠の名でも知られていた）であったことを知る人も少なくなっていく。

昭和二十年の敗戦直前にはここでおびただしい血が流されたのである。ここで多くの人が死んでいった、いや、殺されていったのである。わたしはここで九死に一生をえたけれども……。

昭和二十年六月十五日――この日はわたしの脳裏から将来も消えることのない日である。

当時、府立富田林中学の四年生だったわたしは、前の年から《学徒勤労動員令》によってこの造兵廠へ動員されていた。

十七年に入学したものの、まともに勉強できたのは一年位、やがて英語は敵国語として授業課目から消え、代って軍事教練の時間がふえた。品性のない配属将校や雇いの教官が校庭を闊歩していた。

農作業の勤労奉仕に駆り出されているうち、十九年八月から学校とは反対方向の森の宮へと通勤していた。

その日は朝から雲一つない晴れた日だった。夜勤もあり、三交代制で、その日わたしは早番だった。旋盤、フライス盤、研磨盤、木工、熱処理等に分れ、わたしは電気班だった。所属の第八工場に入り仕事を始めた。

仕事を始めて三時間位経過した時、警戒警報に続いて空襲警報が鳴り響いた。工場の中や周囲には〝タコ壺〟を含む大小の防空壕が多く掘ってあったが、その日に限って学徒だけは二㌔位離れた真田山にある防空壕へ待避するよう指示があった。十人位の級友と駆け足で廠外へと出ていった。省線（今の環状線）森の宮駅のガードをくぐり、しばらく走ると高射砲の炸裂音がしてきた。B29の編隊が上空にやってきている。青空に飛行雲を引いている。そして、綿のような白い塊が落ちてきた。それらがいつの間にか火になって落ちてきた。焼夷弾の〝雨〟である。

わたしたちはめざす壕に到着するどころか、路上で逃げまどった。あたり一面、火の海、点々と火柱がたっている。わたしたち数人は悪臭のたつ溝へもぐり込んだ。石の蓋があって何とか直撃弾を避けられそうだ。

造兵廠のあたりから煙があがり、民家も燃えあがっている。煙がたちこめ、わたしたちはそこからとび出した。でも、点々と火柱がたっている。作業服を脱いで、周囲の火を叩いて消し続けた。その時、バーンと鈍い音と共に焼夷弾が作裂、K君とわたしは倒れた。S君らは必死になってわたしを抱きかかえ、近くの民家の壕へ運び込んでくれた。K君は腰の部分に、わたしは下腹部に破片を受けた。手をやると、わたしの作業ズボンは破れ、血で染っていた。そのままわたしは気を失った。

何時間たっただろう、気がつくと級友たちが担架で陸軍病院へ運んでくれた。朝のあの澄み切った青空はどこにもなく、黄色に変色した空から小雨が降っていた。病院の廊下には負傷者が多数横たわっていた。その夜、わたしは鴻池新田にある分院に移送された。急を知った家族は、松原から歩いてやってきた。

それから数日、動けぬまま多くの負傷者と横たわっていた。背中べったり焼けただれた人に塗る薬もなかった。警報が発令される毎に息を引きとる人が出た。

数日すると、わたしは尿に血がまじるようになった。家族は病院と交渉、レントゲン撮影されると、恥骨盲貫重創、摘出手術必要と診断された。警報の間隙をぬって阪大のM教授執刀で手術が行われた。三時間半に及んだ。若さのせいもあって経過はよく、八月の初めにはやっと歩けるようになり、陸軍予科士官学校の最終選考を奈良へ受けにいった。

それから十日もすると、戦争に敗けた。

あれから四十年経過した今でも、一年に最少一回は火柱の中を逃げまどった夢をみてうなされる。

堺大空襲の猛火をくぐりぬけて

久米田支部
油谷　しづ

当時、主人はまだ独身で海軍に居り、日本の国内がこんなにひどい状態だったとは、まるで知らなかったし、夢にも思わなかったそうです。

私が〈いずみ〉の戦争体験記に応募すると言うと、「もう、そんな古いことは忘れているやろ」と言いました。そんなことは絶対にありません。絶対に忘れられやしません。あの光景は、目に焼きついています。

昭和二十年当時、私は病弱の母と、妹と堺市車町二八番屋敷に住んでいました。姉二人は結婚し、私は高田アルミ（現昭和アルミ）に勤め、妹は女学生でした。会社の近所には高射砲の陣地があり、射つと弾の破片が落ちてきて、そっちの方が危い、などと言っていたのですが、終戦も近い頃には、米軍の艦載機が飛来し、機銃掃射をされるようになり、山下のセッちゃんは学校でそれにあい、死んでしまいました。運動場も穴だらけになったのを憶えています。

食べ物は耳新しくもないヌカの入ったパンを食べたりして飢えをしのいでいました。

忘れもしません、昭和二〇年七月九日、午後九時頃だったでしょうか。和歌山に空襲警報が発令され、堺も発令され、防空壕に入り、しばらくすると解除になりました。やれやれもう一度寝ようか、と家に帰ってすぐのことです。いきなり空襲になったのです。アッという間に離れから火の手が上がり、逃げる時は持っていこうと心づもりしていた物は何一つ持ち出せず、五右衛風呂に食器とお釜を放り込むのが精一杯で、夏布団を水にひたし、かぶって、私―母―妹の順に逃げだしました。

人々は皆、浜の方へ逃げています。私は不思議に人々をかき分け反対の方へ逃げました。焼夷弾はパラパラ落ちてきて道にはね返ります。その時に中味が飛び散り、身体についたら最後、決して火は消えません。黄燐焼夷弾、油脂焼夷弾といって、水の中でも燃えているのです。街が燃える熱風はすごく、夏布団はしっかり持っても飛ばされそうで、すぐ乾いてしまいます。乾くと水にひたして逃げるのですが、その防火用水の中に人がしゃがんで燃えているのさえ目にします。焼夷弾の火を消そうとして水の中に飛び込んだのでしょうが、消えずに燃えているのです。あのパニック状態の中では人は変になるのでしょう。ああ燃えている、と思っただけで、自分たちの布団を水にひたし、また逃げたのです。警防団の人に「消火せんか」と怒られたりしましたが、ただ先へと逃げました。そして遂に、ある橋の手前で母の下駄の鼻緒が切れ、母がしゃがみ込み、「もう動けないから、お前たちだけで逃げておくれ。私はここで死ぬ」と言われま

した。今思えば、五五歳ぐらいで、病弱な母が、よくあの火の海の中を走れた、と思いますが、母と妹を助けるのが私の使命だと思っていたので、ここで母を置いて逃げれば、一生悔いることになると思い、「お母ちゃんを置いて逃げるくらいなら、私たちもここで死ぬ」と言ったのです。この橋を渡ったら良いことがあるような気がして、ようやく渡りました。その町は燃えていませんでした。ほっとして廻りを見ると、金岡の刑務所の近所でした。呆然としていましたら、特に親しくはしていない会社の友人に偶然に会いました。近所に住んでいるからと手を引いて、家に連れて行ってくれました。そこでとても親切にしてもらい、飼っていたうさぎを料理までしてくれ、三日程お世話になりました。

翌日の光景は一生忘れられません。見渡す限り焼野原で、一望でき、「木」はまるでなく、瓦礫の山でした。どこが道路やら、家だったのやら、もう死体を見てもまるで平気でした。極限状態の時は平常の感情とは違ってくるんでしょう。何の感情も起らず「へえ、ようけえ死んだんやねえ」と土居川ものぞき込みました。熱風に我慢できずに川に飛び込み、顔も上げられずに死んだのでしょう。パンパンにふくれた死体が幾拾となく入っていました。燃えている電柱が倒れてきて太股を切断された人がいましたが、切断面は白くなって「魚焼いたみたい。蛋白質やなあ」としか思いませんでした。

南海線の所でも、電車の乗客だったのでしょう、塀に並んでしゃがんで死んでいました。竜神には遊廓があり、最後まで出して貰えなかったのか、男女の区別もつかない程真っ黒に焼けた死体がたくさんありました。当時の遊廓は玄関にきれいな化粧ガラスが入って居り、そのとけたガラスのかたまりを見て一軒、二軒…と数えたのです。

また父親が、子供のでしょう、足首を持って歩いているのです。切断された足は縮んで小さくなっていました。荷物を背負った知人も死んでいたし、浜へ逃げた人は大半が助かりませんでした。たとえもどってきても、宿院あたりで皆、死にました。この辺りの熱風はすごく、浜からの旋風で手をつないでいた子供の手も離れ、子供は火の中へ吸い込まれたそうです。

お墓など作っていられませんから、穴をほり、死体はまとめて入れて焼きました。コンクリートの塀にその煙がしみ込み、いつまでも残っていたり、その後、数年たっても、土中から焼かれた人の髪の毛がでてきました。

家に着いたら、何もかも焼け、庭の御影石もボロボロで使い物にはならず、風呂に入れていったお釜のふちが水中からでていたのでしょう、一部とけていました。瀬戸物はお互いにくっついていましたし、一升ビンなど影も形もなく、ただドロリとガラスのとけた後があるだけでした。土中に埋めておいたお米も食べられませんでした。どうやら、台所の水槽の中に落ち込んだ弁当箱が残っているだけでした。三日程たってから、パッと火をふく蔵があったり、病弱な母ともども生き残れたのが不思議でした。

学校は臨時の病院になりましたが、名ばかりで、ただ床に負傷者を寝かせているだけ、阿鼻叫喚の場でした。

今思えば、私たちは不思議に焼け残った所を逃げたのですが、二ヵ月早く終戦になっていれば、人々は無駄に死ぬことも、焼け出されることもなかったのに…。後から聞いた話ですが、米軍は市内を十字に焼夷弾投下し、その後、浜にそって落としていったそうです。民衆を殺すためなんですねえ。戦争になって一番ひどい思いをするのは民衆です。中国の民衆には日本の兵隊がそれをしたし、ベトナムのことも忘れられません。黄燐焼夷弾や油脂焼夷弾でもひどいと思うのに、枯葉作戦の後は、シャム双生児が生まれたり、奇型の赤ちゃんがたくさん死んで…。戦争はむごいです。

あの体験があったから、あれ以上ひどいことはない、と今まで頑張れたと思います。あれに比べれば、全ては何でもない、と。

今、堺市には当時の面影はまるでありません。道も広くなり、近所にあった六軒筋もなくなり、近所の人もどうしたのやら。あれから岸和田の姉をたよって、こちらに住みついた身には何もわかりません。車町西一丁の西峰姉妹は生きのびました。当時近所で仲良くしていた人や、金岡でお世話になった会社の方が、この記録を読んでくれ、消息がわかればと願うばかりです。（談）

戦時下、国民学校での"銃後"の守り

浅香支部
石川　末子

ものごころついた頃はすでに戦時体制下で、国民学校入学が大平洋戦争勃発の年。終戦の前年に卒業という私の国民学校時代の思い出は、すべて戦争の思い出である。

といっても静かな淡路島の農村で過した私には凄惨な体験は語れない。全校生徒が三百人程の小さな学校であったが、ほとんどの児童が肉親の家族を戦場に送り出していた。中には祖父、父、兄が出征兵士という人もいて、今のように機械化されていない農作業を、残された留守家族がお互いに助け合って銃後を守った。

当時の国民学校は、今ではとても信じられないような事が、戦争を軸に行われた。軍事教練の先生とかで、警棒を腰に下げ、衿に星のついた服を着て、長い軍靴がピカピカ光っていた。教練の時だけか、毎日だったか、職業軍人だったのか、本当の先生だったのか、まだ小さい私には良く分からなかったけど、校庭や教室には似つかわしくない異様な風景だった。朝の校長先生の訓話は、いつも決って、挙国一致で国を守らねばならないこと、我国は神（天皇）の国であるからこの戦争には絶対に負けないこと、勝利の暁まで必死に頑張らねばならないこと、私達が学校に来られるのも、ごはんが食べられるのも、みんな戦地で戦っている兵隊さんのお蔭であること、そして最後に〇〇さんのお父さんが名誉の戦死をされたことなどであった。みんなの黙禱する中で、お父さんを亡くした友達は決して泣かずに誇らし気に胸を張った。

教科書で何を習ったのか、不思議に思い出せないのは、私が余程勉強嫌い

だったためであろうか。修身の時間は決って一人ずつ「教育勅語」を大きい声で暗唱する。作文の時間は兵隊さんへの慰問文、図画の時間は故国の模様を絵に書いて慰問袋に詰めた。手旗信号も作った。実際に山に登って、その旗を振った。モールス信号も習った。

警戒警報のサイレンと同時に防空頭布をかぶって避難の訓練が始まったのは、いつ頃からだっただろうか。大阪、神戸からの疎開の友達が日毎にふえて教室がせまくなってきた。私達は朝学校に着くと、また新しい友達がいるかと胸をワクワクさせた。たった一つの楽しい思い出である。

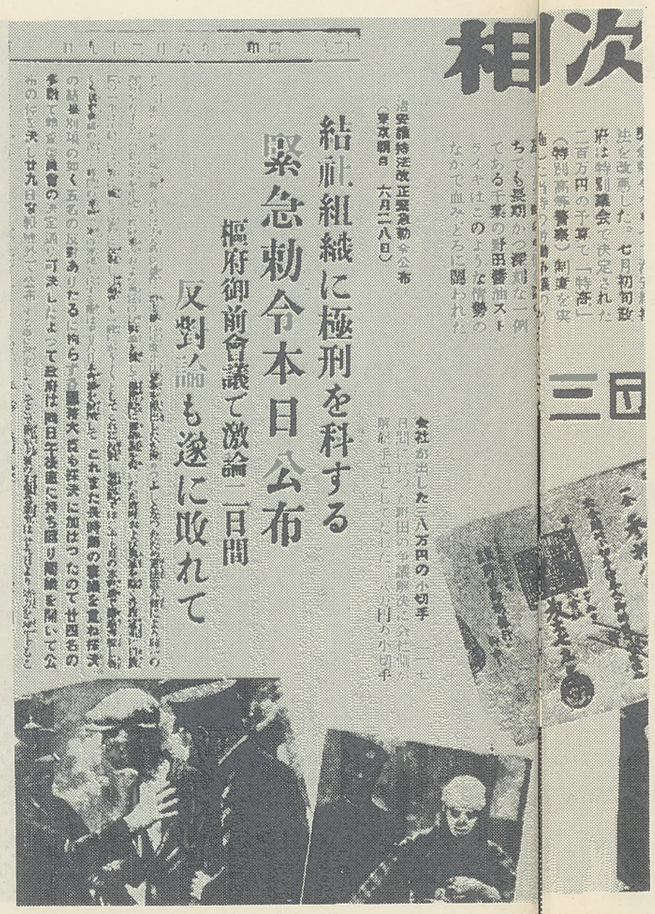
この頃から、私達の身のまわりから物資がどんどんとぼしくなり、わずかな日用品を買うために当番の家の前に行列しなければならなくなった。すべて家族の人数に合わせての配給だった。朝晩のどかな音で鳴っていた寺の鐘の音も聞かれなくなり、台所の鍋も釜もヤカンも、兵器に変わるものは全て供出された。山を開墾し、川の土手も耕し、さつま芋を作った。夏休みの炎天下、山の上へ水を運ぶ天秤棒が肩にくい込んだ痛みは忘れられない。

戦場にいる筈の兄が、ある日突然帰ってきた。輸送船が魚雷を受けて沈没、三時間漂流して助かったという。「靴のまま泳いだので」と見せた足が赤くまだ少し腫れているようだった。休養する間もなく「運がいいからまた帰って来る」といって出かけたまま音信が絶えた。病院で働いていた姉は過労のため、チフスで倒れた。療養に帰った時、高熱のため髪の毛は一本もなく、手足は骨と皮だけ、目だけはキラキラ光って、立っているのが不思議な程だった。少し元気になると「人手不足だから」と、また病院に戻った。私の家にも疎開の家族五人が同居することになった。「小家族には家が広いから」と、役場からの強制である。

訓練だけであった筈の警報のサイレンが本物になった頃、さすがにこの村も騒然となった。西の空が夕焼けでなく真っ赤に染まった夜、近所の人々が集まって、明石か姫路か今焼かれているその空の下のことを案じた。ほどなく広島の新型爆弾のこと、南方の島の玉砕のこと、やがて本土に米兵が上陸して女子供が殺されるだろう等々、さまざまな噂が憶測とデマを重ねて飛びかった。

父も姉も九死に一生を得て生き残ったが、兄は一枚の紙切れと粗末な木箱で帰って来た。カラカラと音をたてたその箱の中には、小さな石ころが三つ入っていたと、父がさみしそうに言った。二人とも「戦争のことは思い出したくもない」と何も話さない。兄のこともう余り思い出すこともない。

戦争は勝っても負けても悲惨なこと。世界地図の満洲と朝鮮半島が日本本土と同じ赤い色に塗り変えられた意味。一億の国民を狂気のように戦争に駆りたてた軍事教育の怖さ——何もかも知ったのは戦後何年もたった大人になってからである。まだ何もわかっていない気もするが、今も地球上には戦火が絶えない。〝大本営発表〟という放送は聞かなくなったが、〝防衛庁〟とよく聞く。いま本当に平和なのだろうか。



結社組織に極刑を科する
緊急勅令本日公布
枢府御前會議で激論二日間
反對論も遂に敗れて

戦争の中の青春

阪元貴美江
（新金岡支部・大西淳子さんのおかあさん）

大正十五年生まれ。満州事変、支那事変、大東亜戦争と、戦争とともに育ったという感じですが、田舎の百姓の子供でしたので戦争という悲愴なものを身にひしひしと感じて育ったわけではありません。今改めて本を読んだり、話を聞いたりして、戦争という恐ろしいものをみつめております。

「天皇陛下のためならばなんで命が惜しかろう」と育てられ教えられ、それで良いのだと信じて、私達の青春はすぎていきました。電話があるじゃなし、テレビがあるわけでなく、ラジオのない家もほとんどでした。ただ新聞だけが唯一の情報機関でした。松原で生まれ育った私でも、こんな様子ですので、もっと田舎に生まれた人は戦争なんて知らないのではないでしょうか。

荷車に山程つんで供出される米俵をみて「うちに残すのはなんでこんなに少いのや」と尋ねた事がありました。「お国のためだから、兵隊さんに食べてもらうんや」と教えられました。戦争がはげしくなると男子が不足し、母は農繁期でなくても毎日野良に出ておりました。学校からの帰り道、バスを降りると家がみえます。戸がしまっていると、とっても淋しく悲しかったものです。カギっ子のはしりとでもいいましょうか。納屋の軒下の地下足袋の中からカギを出し、戸を開けながら「私は子供を生んだら皆が帰って来るのを家で待っていてやろう」と子供心に思ったものでした。

「英語は敵国語であるからやらなくても良い」と、学校できまったみたいです。しかし英語の先生は「戦争に勝っても負けても英語は必要だ。勝てば敵国人を英語で教えなければならないし、負ければもっともっと必要だ」とおっしゃいました。あの先生はずいぶん勇気があったんだなあと思っております。

頭の上から爆弾や焼夷弾が落ちて来た経験はなくても、大阪方面や堺の空が爆撃のため真っ赤になっているのや、高射砲がB29までとどかずに炸裂するのをみております。

夢多き乙女として、兵隊さんに慰問袋を送ったり、「あんたは寅年だから千人針も年の数だけお願いします」と、あちこちからたくさんたのまれて、どんな人が身につけて下さるのかしらと、淡い恋心をいだきながら毎日縫ったものです。「シセンをこえる」と五銭玉を縫いつけたりしました。

また母の衣類で染直しをし、模様のない所をとってモンペの上衣にして少々のオシャレを楽しんだり、四ッ葉のクローバーをさがして慰問の手紙に入れてみたり、ほんとうの事は何も知らず、ひたすら神風を信じて、〝欲しがりません勝つまでは〟と一生懸命生きておりました。「お前のような気楽な者がいたから、戦争に負けたんじゃ」と叱られそうな気がします。

世間にうとく、何も知らなかった者のお笑話を一つ書きます。

学校を出て働きました。「ちょっと行って来てくれますか」という上司の命に、大阪支社ぐらいかと思って「ハイ」と答えましたが、東京本社ということでびっくりしました。当時は軍の証明がなければ汽車にも乗れません。あの時の東京は、今のアメリカよりも遠かったと思います。水盃を交さんばかりの別れで出張いたしました。本社は東京駅の真ん前。宿は水道橋にとってくれていました。仕事がすんで一日休みがありましたので、宿からその辺を少し見物してみようと外に出ました。すると、お堀があって美しいお城の様なものがあります。橋がかかっていて門には兵隊さんが立っています。何だろうかと道ゆく人に尋ねてみました。誰も答えてくれません。ただジロッと顔を見て、そのまま立ち去ります。東京の人は冷たいなあと、お堀にそってずっと廻りました。すると二重橋があるではありませんか。皇居です！　皇居というと二重橋しか知りませんでした。またそんなに広く大きいものとも知りませんでした。守衛さんに聞きに行こうかと思いましたが、よく行かなかった事と今でも冷汗、赤面のいたりです。出張の仕事は何だったか、すっかり忘れてしまいましたが、皇居を「ここは何ですか」と尋ねた事だけは忘れられません。

四分の一の大根で何日も…

富田林中央支部
山口シゲ子

幼い頃から何不自由のない、豊かな環境の中で成人した私にとって戦争は、いろいろな事を教えてくれました。長女が生まれてからが大変でした。ミルクは、配給だけでは足りなくて、手に入れるのにどんなに苦労したか知れません。お米や野菜の配給も少なく、主人が時折買出しに行ってくれました。「行きはよいよい帰りはこわい」の歌のとおり、帰りの検閲を受ける時は、必死の思いで通り抜けてきました。二度と味わいたくない体験でした。

次女が生れる頃（昭和十九年守口市）が一番空襲の激しい時で、お腹がすくのに毎日毎日、芋のツルや菜っ葉の雑炊で、殆んど水ばかり、空腹をおさえて暮らしていました。お米のごはんなど長い間口に入りませんでした。

毎日モンペ姿で、夜もそのまま横になり、空襲警報が出ると長女を背にくくり、次女を抱いて防空壕へ逃げ込みました。この頃は、野菜等の配給も少なく、四人家族で四分の一に切った大根の一片だけで何日も過ごさねばなりませんでした。主食の配給はトウモロコシの粉で、それをダンゴにして雑炊にしたものです。食糧を手に入れる苦労は、現代の若者に話しても、とてもほんとの事はわかって貰えないでしょう。着る物も切符制でしたので、ある物を大事にしました。

いまは物資が豊富で、何でもあります。お金さえ出せば買える時代に育った人達は、もっともっと物を大切にして、物の有難さを知ってほしいと思います。そして私達が体験し、苦しんできた戦争などは、再び起きない様にと願うばかりです。

〝戦争はもうイヤだ〟の一言を！

新金岡支部
三好ナミエ

ずい分前のことですが、まだテレビが白黒だった頃です。「コンバット」という戦争物が放映されていました。私はハラハラ、ドキドキしながら喜んで見ていました。その時母が一言、「よくこんな番組見るな」とポツンと言いま

した。私はその言葉が意外に思え「どうして」と聞いてみました。母は「戦争のことなど思い出すのもいや。戦争という字を見るのもいやだ」と言いました。戦後十余年、もはや戦後ではない、などと言われた頃でしたが、母の心の中には戦争でうけたキズが重くズッシリと沈んでいたのです。

中国残留孤児と言われる人達、広島、長崎の原爆被爆者の方達のことを考えると、戦争というのは一番弱い所に一番大きなしわ寄せがいくのだな、と思います。

しかし視点を少し変えて見ることも必要ではないでしょうか。戦争の話をする時、いつも被害者の立場で話されています。個々に考えれば、たしかに皆被害者です。しかし国として考えてみれば、日本は宣戦布告をし戦争をしたのです。そして中国や東南アジアで現地の人達を苦しめてきたのです。被害者であると同時に加害者の一員であったことも忘れてはいけないことだと思います。(戦争で加害者、被害者という考え方はおかしいかもしれませんけど)

今、着々と戦争の準備をしている人達は、第二次世界大戦をどのように考えているのでしょうか。それを阻止できるのは私達一人一人の「戦争はいやだ」という声しかないように思います。

戦争は二度としてはならない

曙川支部
大西トシエ

私がまだ国民小学校一年生の時、庄内に住んでいました。毎朝集団登校で学校に行く途中、空襲警報発令のサイレンが鳴りひびき、あわてて麦畑に逃込む事がありました。ある時、家族で出かけた帰り、突然急降下して来た戦闘機の機関銃で男の人が打たれ、トラックの下に居た男の人も車が動き出したので、また銃でやられました。こわくて、こわくて、誰も助けに行く事もできず、防空壕の中で、じっとしているしかありませんでした。一番おそろしかったのは、家の前に爆弾が落ち、火が燃えさかり、家を捨てて逃げる途中の出来事、私はてっきり姉に手を引いてもらっているものとばかり思って走っていました。すると後の方で、私を呼ぶ声がしました。上を見ると知らない女の人が私の手を握っていました。そのまま私の名前を呼んでくれなかったらと思うと、今でもぞっとします。家族と一緒に逃げて、麦畑の水のある方にしゃがみ込み、布団をかぶってじっとしていると、遠くの方でプシュン、プシュンと音がしているのが聞こえました。

親達は、親戚をたずねて宿を取りました。水の中に少々の米。そして空豆が少し入った、おかゆみたいなもの。いま思い出してもゾーッとします。

道端の草を取り、草パンと取り替えてもらうために朝早くから並んでいても、私の前で「本日のパンこれで終り」ということもありました。

わたしの戦後

泉南東支部
高木　玲子

戦争は二度といりません。ごめんです。何もなくてもいい、今の寝る所、食物、着る物、今のまま、この世があれば何もいりません。戦争は、本当にいやです。繰り返してはなりません。

小学校六年生の夏休みに、中国の山東省青島市で終戦を迎え、翌年の一月に、青島港から佐世保港に引揚げてきました。家も信用も全財産失ったのに、一人にたった千円のお金が渡されました。これから日本で生きていく私達の全財産だったのです。私も子供心に、これからどうなるのだろうか、つらい一生がはじまるのだなあ、元気で頑張らなくては、と強く感じたのを忘れません。

東京は全部焼けてるからと、伊豆の遠縁をたよって松崎へ行き、親類の二階を借りて住むことになりました。田舎なのに、食物といったら夏みかんしか売っていません。セリをつみに行ったり、海藻を採って食べたり、野菜や調味料は親類から少しずつわけてもらう生活でした。毎日の食事は大根と大根葉にお米が少し入ったおかゆにお味噌でした。父はよく人の世話をする人でしたから「みんなお互い様だから、

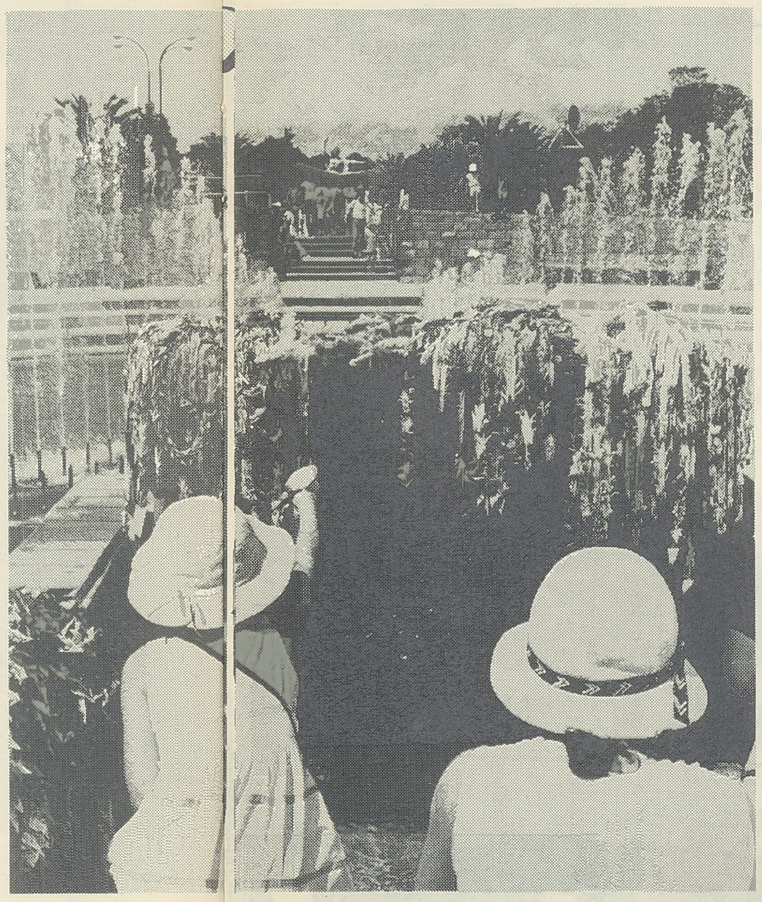
世話になる時はどうどうと世話になって、世話出来る時は一生懸命世話すればよい」と言っていました。母は「世話するほうがよっぽどいい」とつらそうでした。

三月末に東京の叔母の二階へ、家族七人で引っ越しました。焼野原の真ん中に真っ黒になった家が数軒だけ、焼け残ったのです。ガスも水道もほとんど出ません。水は裏の共同井戸でバケツに汲んで二階に運び、二階の廊下に七輪を置いて、木炭がないのでマキをたきます。部屋もススで真っ黒です。いつも火を起しながら二階の窓から外の景色を眺めました。焼野原が一面に広がり、ふた駅も先まで、ずっとどこまでも見えました。防空壕に古トタン板をかぶせた家、晴天の日は、そのトタンの上に何回も水をかぶったようなフトンが干されていました。一番手前の壕の家が魚屋さんです。夜は停電が多く、夕食の後はすぐ寝床に入ります。とろとろとすると、夜の九時頃「魚の配給！」の声にパッと起き、鉄兜を持って買いに走ったものです。何もない毎日ですから、いわし様々です。この頃の鉄兜はお鍋になったりボールになったり、大切な器でした。

東京に来てからお米は病人の父だけが食べ、私達の朝と昼食はじゃが芋と甘くないさつま芋でした。夕食は、とうもろこしの粉のパン（フライパンで焼いたり、蒸したり）は良い方で、脱脂大豆粉のパンは、口に入れてもなかなかのどに入っていかず、ゲエゲエして涙を流しながら食べたものでした。一度だけ「まずくてのどを通らないよ」と言って兄にひどく叱られました。まずくても、お腹をすかせている人より幸福だったのですね。

東京のお店（露店のやみ市）はいろいろ売っていましたが、高価なものは買えません。青柳など貝のむきみ、あさり、いかの塩辛などを毎日食べていました。お米がないので、お弁当が作れず、学校も午前中だけでした。兄達が買い出しに行き、お芋でも満腹に食べさせてもらえたので、どうにか元気で学校に行けましたが、買い出しに行けない家では、のりをすすって生活している人もいました。

現在の学校給食も、その頃の栄養不足を補う目的ではじまったと思いますが、腹ぺこでも食べる物のなかった頃と、給食を半分も残して残飯が山ほどでる現在とをくらべて下さい。戦争のつけの恐ろしさ、みじめさ、もうこりごりです。



鎮魂の歌

狭山支部
城　たけし

ただ一発の爆弾が少女たちの命を奪い
遺体を積んだトラックの荷台から　鮮血が
乾き切った舗装路にネバネバと流れ落ちて
たちまちのうちにどす黒く変色した

昭和二十年（一九四五年）七月の末
真昼の太陽が照りつける舞鶴でのこと

火薬の炸裂と爆風が打ち砕いた顔と胸
ひきちぎった腕と足

ふためとはみられない少女たちの肉体は
またたくまに腐敗をはじめ
粗悪な線香の煙とまざりあって異臭を放った

その夜兵士は　着剣銃をにぎりしめ
少女たちの警備についた

毎朝　整列して工廠に通ってきた少女たち
学業を半ばにして
「お国のため」に駆り出されても
少女らしい夢は清らかにふくらみ
たれに見せよう当てはなくとも
少しでも美しくと身だしなみに心がけた
まこと少女であった日々のいとなみ

いまはもう　身繕いすらできぬままに
むなしく転がされている肉体からは
悲鳴とともに魂はぬけ去って
もはや野犬すら訪いはしなかった

じっと　ただじっと　兵士は
殺された少女たちのうえに
ふるさとの妹を思っていた。

俳句

百舌鳥支部
山中たい子

新緑や反核署名お隣りも

八月の痛み続けりトマホーク

過去帳に八月の死者さまよえり

風鈴の音をたどりし平和かな

地球から核をなくして虹の旗